

槐

かい

岡井省二創刊

平成18年8月号

平成十八年八月一日発行 第十六巻第八号 通巻第一八二号（毎月一回一日発行）
平成二年九月十八日第三種郵便物認可



虚 虚 実 実

高橋将夫

雲海の切れ間に見ゆるこの世かな
瀬戸の潮こんとんとして涼しけり
閻王のお白洲なりし銀砂灘
あごあなごあわびの順に売れにけり

自然居士白玉買うてゆきにけり
救ひの手夏手袋をしてゐたる
白靴を履きて死神去りにけり
胸の火を消してゆきたる虎が雨
アマリリス呪縛がとけてゆきにけり
白山におぶさつてゐる雲の峰
時鳥きよきよじつじつと鳴きにけり

槐賞受賞作品二十句

岩月優美子

波音の乾く風船かづらかな
米櫃の上の白桃匂ひけり
潮騒や顎それぞれ鳥渡る
穴まどひ木屑の匂ひありにけり
鳥影の不意に泰山木の花
落日のすんと秋刀魚焼かれけり
花桐や眉間広がる空なりし
涅槃吹く壁にアデス芋袋
西方へ向く惜春の犀の角
冬帝の吹き清めたる星座かな

もろもろの命みこと三寒四温かな
春雪や狸々布を被りをる
花棕櫚や汽水湖すでに動の色
単衣着てとくと三葉虫化石
椎匂ふ杜にて神の憩ひたる
蟬殻を置く空海の硯石
星月夜孔雀の羽根の宇宙かな
弥撒ミサの声響く花野を過ぎたれば
ゴスペルの響き解け合ふ冬の波
魚は氷に上りてヨハン・シュトラウス

蝦蛄えび 渡辺ひろし

指先のたちまちの萎え山清水
麦刈や雀と鳩のすぐに来て
枝先の尺蠖空に乗るところ
牡丹忌やおうおうと来る寺男
這うほどに渦の膨らむ蝸牛
瓜蠅はさみしよ人に寄るでなく
早く描かねば崩るるよ芥子の花
少年の草魚抱きくる五月かな
河鹿聞くひたすら何も考へず
髪洗ひをり結願の前の寺

特別作品

青蛙どこから見ても讚岐かな
十葉の花一茎を残しけり
ト口箱を跳ね出す蝦蛄をおまけにと
母は子の子は三越の更衣
名刹を知らぬ瓢箪鯨かな
「看脚下」西日の濃ゆき実相寺
葦原や百万遍の行々子
宴終へし鵜舟にたばこ火の一つ
麦刈の人を迎へに船着場
南風や顎動かせて帆を数ふ

槐安集

市場基巳

いつまでも寒し河口を鵜が飛べり
雨過ぎの冷えをふりまきあふるようず
面白がつて我にぶつかる暖雨かな
キツネササゲや水筒の隠し酒
つるみたる鴉はなれて紅つばき

水野恒彦

老鶯や冷めたる灰を捨てに出で
青嵐しなやかにゆく一馬身
地震のあと煙と地にあり青蜥蜴
蟻地獄アリジゴク夕日は地表擦りて来る
海底に山脈ありと楸郵忌



延広禎一

モーツアルト流れ牛小屋夏兆す
三尺寝人魚に蹶搔かれたる
柿若葉雨まつすぐに降つて来し
漁火に烏賊寄せの神集ひたり
櫻鯛を捌く鱗や万華鏡

加藤みき

松蟬や領巾振山にのぼりたる
浮巢から浮巢へ風の通りたる
半夏生明るきこ糸の出入口
卯月波荒玉石の合唱す
青葉闇からつぎつぎと木杵かな

石脇みはる

菩提寺の箕の中げんのしようこかな
菖蒲田のうしろ櫟の山つづく
沈金のかたへ玉解く芭蕉かな
蝸蝓の引つ越して来し神戸かな
マシユマロに果物の味薄暑かな

竹内悦子

かわほりの大曲りして没日かな
葉桜や人の死なんぞ見てゐたる
すぐ裏の川音に寝ね杜若
ゆつくりと飯たべてをる田植かな
孔雀仙人掌とわたくしと夜の空

中島陽華

虚子忌にて金剛石を磨きをり
ウクレレに歌う声あり五月来る
花びらのよぎりて白州正子かな
豆剥くや橋弁慶の聞えをり
横浜の虎魚にこぼす涙かな

栗栖恵通子

万緑の萌えたつ灰汁を掬ひをり
黄道の北にかたむく心太
理趣経や頭陀袋より蛇の舌
花ひさご朝湯の栓を抜いてをり
門川の豆飯にほふ日暮かな

大島翠木

白藤の夜の香を纏ふ女身仏
瀬を渡り君豌豆を摘まんかと
良寛書それはそれなり娑羅の花
自愛とはまつ暗がりの螢かな
富士山を見てゐる烏太宰の忌

雨村敏子

霾天や人間の影みな消ゆる
カオスかつデルタなりけり種案山子
ぼうたんの揺るるは山の精ならむ
花守の去にたるあとの桜の木
葉牡丹の茎立つはこれ麟麟かな

黒田咲子

落飯「平生」出版記念会や八十もつて童顔ぞ
アンテナへ鴉卵の花腐しかな
鶉の首に水ぶつかつて岸を削ぐ
緑蔭のかくも大きなにはたずみ
赤蟻と行き交はしたる団子虫

小形さとる

金めばる泡立つ夜となりにけり
種芋と在所の婆が二三人
村ひとつ大蛇おろちの縮に暮れぬたり
掘れば掘るだけ馬鹿貝という奴は
残花是レ宗ニノ耳トオモハルル

本多俊子

プラタナスの花に触れゆく弓袋
やれ壺に白雪けしの咲きにけり
惑星の水匂ひけり著莪の花
箸置きは木香ばらを七回忌
いちにちの雨きらきらと苔の花

石川新緑の忌

天野きく江

六月やまどろめるときは未知数
追憶の裏も表も薔薇なりき
墓域より出たる肩へ栗の花
万緑をゆりかごとして声のとぶ
かわほりに無言の音波返しをり



槐市集

宇田喜美栄

古代米の飯炊きあがる端午かな
まず一貫黒潮を来し初鯉
草木染其処に若草色の繭
蒲の絮飛び発つ風に出逢ひけり
寄居蟲のかさこそあるく月夜かな

植木戴子

新緑はジルバのリズムで揺れてをる
放水の音響きをり柳の芽
みちのくの地図広げをり椽の花
夏めくや膨らんでをる頭陀袋
ファックスで新茶を頼む日差かな

植松美根子

どの家も堀を守るやきんぽうげ
細長きわが町抜けし麦の秋
更衣夫婦に時差のありにけり
豆飯の好み隔世遺伝かな
一片のゆるみもなくて薔薇咲けり

大山里

斑猫の山は宝石箱となり
若葉して川の流るるネオン街
草に寝ねほとけ心や朴の花
朴咲いて幹の太さを確かめに
これやこの櫛一本の葉を広げ



槐集

高橋将夫選

朝焼に大和国原浮いてきし
枚方

中野 京子

白鳳の黒髪茅花流しかな

裸婦像の脇に玉とく芭蕉かな

枚方

谷村 幸子

どこまでも新樹の風の水鏡

戒壇をめぐりてよりの新樹光
楊梅やむかし庄屋の太鼓

余花白く風に雲にもらざりき

御靈屋に松蟬とゐる真昼かな

語らふに烏賊の腹わたすつとぬけ

神峯山の溪に沿ひけり朴の花

神鏡に風わたるなり桐の花

卵白の泡立つてをり吹流し

京都

竹中 花

卯月野や鳥獸戯画に影なくて

魅を買ひし人の背中に樟若葉

洗ひたてのシャツ匂ひをり夏来る

神の像四葩の花のひかりかな

水馬水よごさずに跳び交へり

式神の侍べる縁側夏の風

打ち振りにことに丹波の小判草

五狐の神卯の花腐しとなりしかな

アトラスの肩の先より夕焼くる

かの世にて呼びとめられし螢かな

東京

西村 純太

葉桜や太陽系に揺るぎなし

大日の払子触れたる麦の秋

真つ青な風のかつんと罌粟坊主

リラ冷や普賢文珠と昏れにけり

餌を曳きし声わつしよいと蟻の列

蜘蛛のごと辻占ひ師燭ともす

きつちりと死ぬため生きる白上布

語りえぬ五月の夕陽沈みたる

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

語らふに烏賊の腹わたすつとぬけ 中野 京子
腸ごと足を抜いて、イカを料理しているだけの景だが、「話して胸のつかえが取れた」ような気分させてくれる一句。

神鏡に風わたるなり桐の花 近藤きくえ
まことにおごそか。作者の精神のあり方そのもの。

真つ青な風のかつんと罌粟坊主 近藤 喜子
今回は風がかつんと当たった程度。罌粟坊主もこれからが大変。

裸婦像の脇に玉とく芭蕉かな 谷村 幸子
意味を持たせない句が上等といわれる。しかし、ほどほどに意味を感じさせられる面白さも捨て難い。

卵白の泡立つてをり吹流し 竹中 一花
風にそよぐ吹流しにソフトな卵の泡が実によくマッチしている。

かの世にて呼びとめられし螢かな 西村 純太
ともかく、螢はかの世でも呼び止められそうな存在なのだろう。

マンゴーの色アステカの夕日なり 岩月優美子
マンゴー。メキシコの古代文明アステカへの郷愁。

路の臺鍾乳石の菩薩かな 植木 戴子
なるほど、路の臺がやさしい鍾乳石の菩薩にみえてくる。

茄子苗の根づきたる朝水の音 近藤 紀子
朝の水音から茄子苗の根づきのよろこびが伝わってくる。

大手毬ゆれて飛び立つ気配かな 中田 禎子
もし飛ばば、柳絮などと違って風船でも飛ばぶような感じかな。

アオダモの花の見抜きの支度かな 瀬川 公馨
アオダモは初夏に白い花をたくさんつける。見抜けとなると、後はただ本人の幸せを願うばかり。

松苗の神事畏み雀の子 久保東海司
松苗の神事に雀までが畏まって居るさまがなんともほほえましい。

げんげ田やけむりのやうに母の居る 万城希代子
げんげ田は幼い日の故郷の景を思い出させる。そこに居る懐かしい母の姿は烟のようにおぼろ。

木苺に実のつく頃は居らざらむ 十川たかし
一期一会。でも、木苺に実のつく頃は、きつとまた逢えますね。

白牡丹石の無言を畏れけり 大山 里
白牡丹と石だけの静寂の景。凄みを感じさせる。

魂ひとつさくら吹雪を抜けにけり
魂の行方と、残された桜の行く末やいかに。

南 一雄

神の息かかりて泰山木の花
泰山木。悠然たる響きである。神の息がかかっていると
近藤 公子
ても納得できる花。

咲きすぎし薔薇の月日と言ふべかり
アンドロメダ星雲高き衣がえ
霧や影絵のごとく街にをる
十葉を干し淡交をこころざし
とどまれば明日はなかりし蟻の道
麦の秋アルルに死せるゴッホかな
蘇るモナリザの声新樹光
栄螺つるりと臍の緒を思ふなり
羅生門くぐれば雀隠れかな

秋岡 朝子
金澤 明子
宇田喜美栄
加藤富美子
柴田 靖子
谷岡 尚美
奥村 邦子
犬塚 芳子
寺田すず江
(以下略)